研究

福川史のはじまり

会員　西村修一

謎の大和守

戦国時代以前、福川にはまだ集落らしきものは出現していなかった。この地帯は夜市村と富田村のさびしい村境といった感じであった。

明治に至ってすら、福川の氏子は本陣川より西は夜市の鷹飛原八幡宮に、東は富田の山﨑八幡宮に属していたというから、その名残がある。福川にある周南市新南陽民俗資料展示室に、明治五年に発行された氏子札が一五枚ケース内に展示してあるが、実際、鷹飛原八幡宮と山﨑八幡宮発行の二種類しかない。

『新南陽市史』は、福川の起源に関わる本陣福田家等に伝わる「福田家文書」の伝承を載せる。

「戦国ノ砌、盗賊所々ニ徘徊シ民之苦不大方。福田某大津住居及露見。仍テ国主之命有之、渡陸地盗賊之蒙可為押司旨。奉従其命渡此地。頃は天正末也。然ニ此福川は浦辺白浜伝ニて左右山際民家纔両三軒、戦後之有様可悲次第也。招四方集人民浜ヲ作畠海作田、漁亦始故以人民頗集リ、町普殆連。是福川町之開祖也。」

戦国時代である天正年間の末頃、夜市村と富田村の境界辺りは盗賊が徘徊しており、民は安んじていなかった。福田某という者が大津島にいることがわかり、国主は陸に上がって盗賊追補の役を命じた。しかし、その辺りは

ただ白浜の海岸があるばかりの、東西の山際にわずか二、三軒の民家がある程度のうらぶれた浦であった。福田某氏は各地から人を集め、開墾や干拓を進めて農地を広げて、漁業も始め、しだいに人が参集するようになり町ができていった、という。

「国主が命じた」とあり、盗賊追補の役というから、単なる島民ではない。やはり武士なのではないか。

「国主」とは、毛利輝元の時代だから、徳山地方の新たな支配者となった杉元相（天正一三年一月二六日没）の子の元宣（天正一七年三月六日没）その後を継いだ元常の可能性もある。

元大内氏家臣の元相は、毛利元就による防長計略の中で降伏し、大内氏の残党の平定等に功があり、野上庄（後の徳山）に館を構えている。有名な話だが、元宣一八歳は児玉家からの美人の姫一五歳を迎えるが、輝元の横恋慕で主の家臣に奪われ、元宣は太閤殿下に直訴に及ぼうとして、輝元の後見人だった小早川隆景に謀殺される。「二の丸様」の話なのだが、息子の就隆が徳山藩主として戻ってきたのは歴史のアイロニーとしか言いようがない。郷土にはワクワクするような歴史が眠っている。市民はもっと郷里の歴史を知るべきである。きっと心が豊かになるはずである。郷土の歴史を学ぶのは住民の義務であるとは言い過ぎかもしれない。興元寺を訪れたとき、本堂にまで上げてもらい住職にざっくばらんにお話を伺えたのは楽しい想い出になった。

本陣福田家にこういう伝承が伝わる。

福田大和守は、青雲の志に燃え、九州のとある港から年に一、二度、江戸に上る船旅をしていた。門司で船泊りして、瀬戸内海に入ると、一匹の入道ダコが船の端にへばりついていた。船頭のかしらは塩ゆでにしようと引っ張り上げようとしたが、生まれつき優しくて情け深い武士である大和守は「怪我をしているではありませんか。フカに追われて、この船に助けを求めたのでしょう。」と言って、かしらにお金を渡して大ダコを海に放してやった。海はますます荒れ狂い、船はひっくり返ってしまった。大和守は漂流して助けられ、小島の漁師の家にい

た。親切に甘え、数日を過ごしたが、大望のある身なので、島を出る機会を狙っていた。

月が浜辺を明るく照らす夜、砂地をはう音に目を凝らすと、以前見たタコの倍はある大入道ダコがこちらを向いて頭をすりつけて御礼を言っている。「いつぞや命を救っていただいた子ダコの親です。あなたのお役に立つため、わたしが本土までお連れしましょう。どうぞわたしの頭の上にお乗りください」。

大和守は心の中で島に別れを告げると、翌朝、周防のとある浜辺に着いた。大和守は「ありがとう。この恩に報いるため、拙者は一生タコを食べない」と大ダコに約束した。以降、福田家ではタコを食べないのだという。どうしても食べなくてはいけないときには、イカだと思って食べたという。（『語り継ぎたい山口の昔話』）

「大和守」という始祖的主人公が出てきたが、「大津島」という地名は出てきていない。九州からやって来た福田と言えば、九州平姓福田氏が想起される。

平安時代の末期の治承四年（一一八〇）、後白河法皇家臣の平兼盛（平包守）が九州の肥前国老手・手隈の定使職に任ぜられて下向した。その子の平包貞（兼貞）が福田荘の地頭に任命されるも、文治五年（一一八九）、平包貞には子が無く、家督は弟の平包信（兼信）が継いだ。平包信は土着して、その地を「福田」と名付け、自身も「福田」を名字としたのが、九州平姓福田氏の始まりである。

しかし、柏屋五代当主の悌夫（一八九五～一九六六）は、福田の先祖が平氏であるとは聞いたことがない、と述べ、むしろ、橘諸兄公の子孫であると言う。柏屋の新寿は、毎年、床の間の中央に橘諸兄公を配した（徳山藩の絵師朝倉南陵による）三幅対（左右は丹頂鶴）を掛け、大きな鏡餅を置くのだそうだ。ただ具体的な史料はない。

「大和守」とは何か。大名でもないのに簡単に名乗れるものか。身近で渉猟するなら、戸田の堅田家の初代は毛利元就の家臣の粟屋元通の次男元慶なのだが、「堅田大和守」を名乗っている。杉元宣の妻を思って悶々とす

る輝元を見かねて、佐世元嘉が奪取を命じたのが、杉山土佐守だった。

本陣家には菩提寺たる真福寺の墓地にわざとらしい「大和守」の立派な碑が建てられており、また丁寧に「先祖　種善院青雲惠丹禅定門　天文十三年（一五四四）一月十二日　福田大和守」なる位牌まで存在する。

信頼できる位牌が存在し、確かな福田氏の始祖と言えるのは福田和泉守隆吉である。系図的には、「大和守」は和泉守の先代として設定されている。

真福寺にある福田大和守の墓

悌夫は、〈福田大和守〉の碑や位牌は幕末から明治にかけての本陣家の当主であった福田四郎兵衛正憲（半僻。一八一一～一八九八）が造ったものとしている。「半僻が古庄屋との本家争いに対抗した意味が多分にあったと考えられる。」（『祖先記』二〇一三）とするのが、真相に近いのかもしれない。

「本家争い」とは、次のようないきさつによる。「一旦は西町（本陣町）に安堵し、後に父和泉が長男但馬をその家にとどめ、次男太郎左衛門と共に中町の新居を構えた経緯が、本家争いの本ではないかと推せられる。」（同）

半僻は篤姫一行を接待している。『新南陽市史』や『南陽町史』に彼のプロフィールが載る。

「福田正憲（半僻）、通称四郎兵衛。一〇代目の本陣家当主。明治二年から寺子屋を開き、男女約七〇名に読書や習字を教えていた。漢籍に通じ、和歌・弓術を烏丸卿に学び、その達人といわれた。また三条実美とも親交があり、実美から贈られた写真三枚とその書が現存して

本陣家 10代目当主福田半僻

いる」。

参考

〔本陣家〕福田和泉守隆吉－但馬守信正－佐渡守安則－宇右衛門清澄－宇右衛門安澄－宇右衛門久澄－宇右衛門吉澄－宇右衛門正澄－宇右衛門俊澄－半僊…＊和泉守より数えて一〇代目である。

『新南陽市史』は、福田家の祖先についても続ける。「福田家の祖は福田大和守正盛（まさもり）といい、関ケ原役で敗れ、西下の途次、船が福川沖で難破したため馬島（うましま）に上陸し、その後、福川に移った。」

これまた新しい「福田氏」の出自伝承である。具体的な「正盛」という名が出てきたが、九州からではなく、関ケ原の戦いに敗れ西下する途次だと言う。行く先は九州だったのか。九州から参戦したのか。

大津島（難破漂着）→福川浦は定型なのだが、それ以前が曖昧で、諸説ある。ここでは大津島とは「馬島」のことだと、具体的な地名が出てきている。またひとつ、知らなかった起源伝承を知れた。

天正一四年に、肥前に残っていた福田一族の福田忠兼（ただかね）は、息子の兼親（かねちか）の妻に大村純忠の娘を迎えているから、大村氏の傘下に入ったと見てよいだろう。大村氏は東軍に属して、江戸時代に入って、所領が安堵されているから、この伝承と肥前福田氏とは結びつかない。

悌夫は「福田大和守忠兼の子の兼親の兄弟に福田和泉守あり。文禄慶長（一五九二～一六一五）の頃、肥前を去って東上し、周防国大津（おおづ）島を領する。更に福川の浦に渡って安堵する。福川福田家ここに始まる」と、本人は橘諸兄始祖説なのに、福田大和守から福田家の家系を書き始めざるを得ないのは、やはり和泉守以前が判然としないのだろう。悌夫は、大津島に現れたのは和泉守だとして、漂着したのではなく、「領して」いたのだとしている。たぶんに憶測の感じがする。

しかし、福川福田家の始祖を簡単に『大村郷村記』と結びつけてよいものか、根拠は脆弱なように思える。

大村市立史料館に問い合わせた。（対応：学芸員川内）

長崎県立図書館所蔵の『大村郷村記』（附録含め七九

巻あります）は、大村藩領内の四十八の村について、土地や作物や火災状況などがそれぞれ記録されています。国書刊行会より全六巻の刊本が発行されています。大村郷村記第七〇「福田村」の由緒の項目に、福田大和守忠兼の名と福田家について出てきます。（刊本第六巻二三九ページ）

福田大和守忠兼の子である兼親と弟兼重は、文禄元年に朝鮮への出兵に参加したことが、当館所蔵の『新撰士系録八上』に記録されています。兼親には兼重と兼房という弟がおりますが、兼重は一六歳で朝鮮へ赴き、のちに大村藩内の式見村を賜っています。（式見六之允兼重と名乗っています）もう一人の弟、兼房については「兼房」という名しか記されておりませんが、兄弟や親の名、年代から、この兼房という人物が福田和泉守である可能性はあるかと思います。

福田氏の九州出自説を、福田大和守忠兼の子の兼親の弟に求めてよいものか、はなはだ不確実である。

今まで取り上げてきた起源伝承は主に本陣由来のものだったが、脇本陣側の伝承が新たに入手できたので紹介したい。

脇本陣側の始祖伝

徳山藩主と齟齬（そご）をきたし、脇本陣家から出て宇部に居住するようになった一族からの情報である。大宰府岩屋城の古文書が存在するという。

『備前かもの城主なり（十二万石）十郎左衛門（十二郎大夫）正直　壱万八千騎籠る　毛利元就の大軍を引きつけ　勇気を奮い　すぐに大将を討ち取る　ついに乱軍のうちに討死す　天正十年頃なり　残兵一族　九州肥前落着なり　筑後岩屋城に籠る　高橋昭遼一万八千騎　大手を守る　四人の子供　武下民部太夫正包（まさかね）（父討死の時十三才）　左馬之助　新左エ門　松衛門　辰巳からめて大将なり　二千七百騎なり　薩州島津義久十万騎と防戦す　四人共に至って剛勇なりと　功名を示すこと　ついに勝利なくして　肥前の国福田に在住す　和泉守は家

老（井上・安達）両人を召し連れて　防州大津島に漂着ついに福川に住居す　福田和泉守なり　福川なり　清栄宗春居士なり　寛永十三年四月十五日死す』

はなはだ断片的な報告だが、他の断片も併せて編集すると以下のようになる。

備前かもの城主の十二郎大夫正直（十二万石）は、天正十年の秀吉による高松城攻めの時、毛利の大軍に攻められ奮戦したが戦死した。

十二郎大夫の四人の子供である武下民部太夫正包（十三歳）、左馬之助、新左エ門、松衛門らは、若干の家臣と共に伝来の宝刀「長光」の光を照らして暗路を踏んで城を脱出して、壱岐の島まで落ちのびた。天正一四年には筑後の岩屋城に籠った。一万八千騎で大手門を守って、薩州島津義久の軍十万騎と戦った。四人兄弟共に勇敢に戦ったが勝利を得ることなく、肥前国福田荘を所領地として「福田」姓に改めた。

竹之下民部太夫正包は初めて福田姓を名乗り、家老の井上、安達の両人を召し連れて周防国の大津島に漂着した。ついには福川に居住した。この福田和泉守が福川の初代である。

薩摩・大隅・日向の三州統一を果たした島津氏は九州制覇を目論んで筑紫を平定するために、天正一四年七月一三日に、七〇〇余名で籠城する高橋紹運の大宰府岩屋城を二万の大軍で攻めた。二週間抵抗したが、各出城や砦が次々と陥落し、虚空蔵砦を守備する福田民部少輔も討死にした（ウィキペディア）。

古庄屋伝承は、数値が大げさだし、「寛永十三年」と、岩屋城の戦いとはボケた年代となっている。〈福田民部少輔〉を見つけて関連付けたとも思えなくもない。ともかく、備前かもの城主の出自にはビックリした。

備前の全城を検索しても〝備前カモ城〟は出てこない。平安時代起源の九五〇年の伝統を持つ備前加茂大祭で有名な加賀郡吉備中央町加茂市場にある加茂総社宮付近だろうか。備中加茂城なら備中高松城の南約四キロにあるが毛利方である。さらなる調査が必要だ。

東からやって来た？

以前、湯郷将和・山瀬洋子による小説『黎明』（叢文社二〇〇三）の中の福川起源説を紹介した。

「関ケ原で敗れた後、長宗我部盛親の三男隆親は毛利輝元を頼って落ちのび、福川で自活を許された。ほどなく隆親は下松に移ったが、家臣団は土佐時代の半農生活にもどり、長宗我部の部将だった福田氏らは、毎年正月になると下松の旧藩主を訪ね、主家再興の誓いを口上する。」

湯郷氏がいったいどういう史料からネタとされたのか、こんな話聞いたことがないと以前述べたが…。言ってみるもので、すぐに反応があった。下松の郷土史家吉本典克さんから、下松には長曾我部元親の末裔を称する一族が存在し、小山良昌先生が『下松地方史研究』に書いておられる（「小嶋惣兵衛と下松浦の発展」）という情報を頂いた。江戸時代の初期に徳山藩の御用商人として活躍した小嶋惣兵衛についての論考であった。

〈この下松浦の浦年寄などの村役人を代々にわたって勤めた小嶋家は、同家所蔵文書によると、土佐国の戦国大名として有名な豪族〝長宗我部元親〟の末裔と伝えている。〉

〈小嶋家文書「わらひ草」（小嶋惣兵衛著か）によると、父（長宗我部元親の子盛親の事か）は大坂夏の陣（一六一五）の際、豊臣秀頼と共に石山陣に籠城し、討ち死にした。残された五人の子供の内、末子の孫作（惣兵衛＝長宗我部親秀）は姉と共に備前国児島に潜伏し、やがて長門国奈古村に逃げ延び、その後毛利就隆の城下町下松に移った。そして、父の遺言「三代は主君に仕えず。家名実名を捨つべし」に従って祖先の祭祀にのみ専念していたところ、毛利日向守就隆に拝謁して庇護を受け、海岸沖島において鰯網の網代を賜った。また、城下町下松移住後は屋号の「紺屋」を名乗り、商人として町奉行や代官等にも出入りが許され、やがて藩の家老職の重臣にも重用されるところとなった。その一方で、町人として下松町の発展にも貢献し、町年寄役を勤め、藩か

ら諸問屋株を許可されて藩経済にも貢献している。その関係もあって、藩から扶持を賜う申し出もあったが、父の遺訓を守ってその申し出を辞退した。…当主の小嶋惣兵衛はかなり優遇されていた。〉

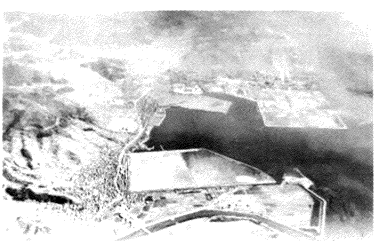
初めて目にした原稿で、これも今後の研究課題である。長曾我部はなんと身近な下松にいた。湯郷氏のフィクションのどこにまで迫れるか、皆さんの情報も期待しています。

『新祖先記』発刊

二〇一五年七月に、柏屋（かしわや）の総括版と言うべき『福川柏屋　新祖先記』を柏屋新宅四代目の福田雅正（つねただ）さんと共著で出版した。

表紙には、二代目丈之進（貴族院議員）、三代目秀夫（県会議員）、四代目民平（衆議院議員）、五代目悌夫（衆議院議員）の写真を並べた。丈之進は福川銀行の創始者であり福川駅を造った。秀夫は福川辰尾神社を創始した。民平は福川図書館を建てた。悌夫は県下一位の資産家になった。四人は、歴代福川銀行の頭取である。

読みやすいので、ぜひ手に取って頂きたい。山口市、周南市、下松市の図書館で閲覧可能です。



2015年に発刊された

参考

〔古庄屋〕

福田和泉守隆吉－太郎左衛門－嘉平衛－三郎左衛門－彦兵衛－孫三－忠四郎－忠蔵－忠左衛門－源右衛門…

〔柏屋〕

〈初代〉嘉兵衛（忠左衛門四男）－〈二代目〉丈之進－〈三代目〉秀夫－〈四代目〉民平－〈五代目〉悌夫